

六或示現と普現色身三昧

岡田 行弘

一、はじめに

二〇一八年十一月九日、第七十一回日蓮宗教学研究発表大会において、「初期大乘經典の構成要素―転法輪、包括性―」という表題で発表した。その際、初期の大乘經典における共通の構成要素として、經典が自らを第二の転法輪であると位置付け、また終結部（いわゆる流通分）において「当經典は仏説の一切を包括するものである」という言明をするというような經文の存在を指摘した。そのような共通性の一つとして、『維摩經』と『法華經』に見られる普現色身三昧（現一切色身三昧）があることに關して、次のように述べた。

維摩は第七章「如来の家系」（仏道品第八）で、普現色身（*sarvapuṣaṇḍarśana*）という菩薩に対し、42の偈によって菩薩の理想像を説示している。この箇所、特に第15偈以下は、『首楞嚴三昧經』の中の三昧の力によって梵天、転輪王、家長などの姿を現わすという經文（丹治1980、255以下）、また『法華經』における妙音菩薩の三十四身、觀世音菩薩の三十三身の記述との共通性がある。

『法華經』の卷末六品においては、菩薩が種々の姿を現わして法華經を説くという普現（現一切）色身三昧が重要なテーマとなっている。これは、『維摩經』や『首楞嚴三昧經』と共通する菩薩の徳目である。高位の菩薩が様々な姿を現すことは、首楞嚴

三昧の特性の一つである。

『法華經』の中でこの三昧がはじめて言及されるのは卷末六品の冒頭の「藥王菩薩本事品」第23（梵本XXIII）である。藥王菩薩の前世の姿である一切衆生意見菩薩は、日月淨明德仏のもとでヨーガに専念し、現一切色身三昧を得た、そして焼身供養し、さらに生まれ変わって仏を供養し、その入滅後も臂を焼いて供養し、無数の人々を導いて、同じ三昧に住せしめた。この三昧は続く「妙音品」「觀音品」において具体的に説かれていて、『法華經』の流通のために、極めて重要な意義を持つ。それ以前の諸品ではこの三昧は説かれていない。後述するようこれは重要なポイントである。

ちなみに宗定日蓮宗法要式平成版^二の先師回向文例には「仰ぎ願わくは上人、一念三千の妙土に於て加持法音の供養を受け、普現色身三昧に入つて淨仏国土の化用を施し給わんことを。増田妙道 位隣大覚（以下略）」というように遷化した先師が到達する境地として普現色身三昧が用いられている。

普現色身三昧は、菩薩が衆生救済や法華經説示のために種々の姿を顯す特別な能力である。この「種々の身体を示す」という高度の能力は、当然ながら仏にも一種の神通力として具わっている。それが仏の口から語られるのは、『法華經』「如来寿量品」における「六或示現」である（↓補注）。即ち、教主釈尊は、「私が成仏して以来、久遠であることかくのごとし」と宣言し、「如来の所演の經典は、皆衆生を度脱させるためである」として、その方法―六或示現―を述べる。

如来所演經典。皆為度脱衆生。或説己身。或説佗身。或示己身。或示佗身。或示己事。或示佗事。諸所言説。皆實不虛。（兩讀開結419）

なお、大正蔵のテキストでは、「佗」ではなく「他」を用いている。以下、これに準ずる。

この六或示現と普現色身三昧の關係について、伊藤瑞叡は、如来寿量品における如来秘密神通之力の語義概念を考察するに際し、如来において samādhi（三昧、等持）と adhiṣṭhāna（秘密神通、加持）とに内的な關連があることを指摘し、次のように述べる。^四

なお寿命品において釈迦牟尼如来の（等持力による）加持力が自らに加持して六或示現を可能ならしめるものであることは見やすいことである。その六或示現（upadarśana）は薬王品に見える現一切色身三昧（sarvarūpasamdarśana samādhi）、妙音品に見える現一切色身三昧（sarvarūpasamdarśanasya samādhi）普現（色身）三昧、現入衆像三昧＝衆（もろもろ）の像（すがた）に入るを現す三昧？）に、現色身という点で共通性をもつ。

なお観音菩薩の三十三身には言及しておられない。

注目すべきことに、日蓮は後述するように、教主釈尊が種々の仏・如来・菩薩・諸天・国王等の姿を現す経証として、六或示現を挙げている。『法華経』における六或示現の経文は、寿命品の本仏が自ら開示して、当然ながら仏にのみ可能な能力である。

一方、現一切色身三昧（＝普現色身三昧）は極めて高度な三昧であるが、初期大乘經典においては、仏ではなく高い境地に到達した菩薩が具える能力である。三昧という用語は、通常、心を静めて対象に集中し心を安定させる修練や、その結果としての心の平静を意味する。しかし、今の場合、そのような理解は必ずしも適切ではない。山部能宜は大乘經典に見られる三昧の列举や禪定の記述について、次のようにその意義を明示している。^五

信仰の対象としての偉大な仏・菩薩の超人的実践を讃えるために説かれたか、あるいは実践法そのものよりはむしろ禪定修行の結果到達された菩薩の深い悟境を示すために説かれたものも多く、必ずしも生身の人間が取り組むべき具体的な禪定の方法論を示すものではない。

このように三昧は、菩薩の高度な能力・その境地であると理解される。以下では、釈迦本仏の神力としての六或示現と菩薩の普現色身三昧の関係を考察し、『法華経』の独自性と宗祖日蓮の解釈を明らかにしたい。結論を見据えて述べるなら、日蓮は六或示現と菩薩の普現色身三昧をいわば融合・統一し、法華経の本仏が衆生の現前に出現することを明示するのである。

そもそも『法華経』において寿命品で六或示現が説かれ、薬王品以下で普現色身三昧が説かれるのはなぜなのか。もちろん前者は仏の立場からの説示であり、後者（薬王・妙音・観音品）は菩薩の所行である、ということで一応の説明にはなるが、その

ような構成・配置になっている意味をあらかじめ検討しておきたい。そのためには、他の經典において普現色身三昧がどのように説かれているかを見ておく必要がある。

まず、『維摩經』『首楞嚴三昧經』『法華經』における菩薩の変身の經文を確認する。

二、『維摩經』と『首楞嚴三昧經』における種々の変身

(1) 『維摩經』第7品「如来の家系 (tathāgatagotra)」(羅什訳では仏道品第8)において、普現色身 (sarvātūpasamdarśana) という菩薩は、維摩に「あなたの家族・友人・親族・侍者等々はどこにいるのですか」という質問をする。それに対し維摩は42の偈文で答える。まず、菩薩たち (仏に匹敵する高位の菩薩) にとって般若波羅蜜が母であり、方便が父であり、法喜が妻である、と定義する。次の偈のように菩薩たちは、自在にあらゆる姿 (rūpa) を示すことができる。^六 これは普現色身三昧の定義に他ならない。

sarvasattvāna ye rūpā rutaghoṣas ca iritāḥ /

ekakṣaṇena darśenti bodhisattvā viśāradaḥ //16//

一切衆生には様々な姿や発せられた音声があるが、

畏れることのない菩薩たちは、「それらを」一瞬にして、示現する (VII. 16)^七

またその菩薩は衆生を成熟するために老病死を示すなどあらゆる方法を取る (第18偈)。その過程において、彼らは月・太陽また、帝釈天、梵天、世界の主 (prajēsvara)、水・火・大地・風となる (第23偈)。第32偈では遊女 (ganika)、第33偈では村長 (grāṃika)、商人の長 (sārhavāna)、祭司 (puṛōhita)、首相 (agrāmātya)、大臣 (amātya) となる。第35偈では大力士 (mahān-agna)、第37偈では五神通をもつ聖仙 (rṣi) として衆生を導き、第38偈では、召使 (ceia)、奴隸 (dāsa)、弟子 (śiṣyatva) と

して衆生に給仕する。ここで種々に説かれる菩薩たちの賞賛さるべき超人的な能力・行動は、「普現色身三昧」と総称することができる。それは対告衆である菩薩の名前が普現色身であることによって間接的に示されているのである。

(2) 『首楞嚴三昧經』、すなわち「勇者のように進む三昧」というタイトルの本經は、高度の能力を持つ勇者（＝菩薩）の活動を可能にする三昧を説く經典である。仏とその前世の菩薩行を生み出すこの三昧を具足した菩薩は生死を超越して寿命が継続するとされるが、これは『法華經』の久遠仏に先行するものと見る事ができよう。

首楞嚴三昧を得た菩薩は、種々な身体を現じて衆生を教化すると説かれている。「この三昧によって、仏は菩薩であった時、どのような自在神力を表されたのか」という質問に対して、仏は大略、次のように答えている。^八

この三千大千世界の任意の閻浮提において、六波羅蜜の行を現じ、五神通の神仙を現じ、居家、出家、兜率天の一生補処、轉輪聖王、釈提桓因、梵王、四天王等の六欲天の王、長者、居士、小王、大王と現じ、刹利、バラモン、菩薩等となり、ブツダの生涯と入滅、舍利、寿命の長短等を現じる。

首楞嚴三昧によって菩薩は自在に変化身を示すという高度な能力を発揮するのである。また別の箇所でも、現意（還梵名は *buddhamatyabhimukha*）という天子は、「首楞嚴三昧の果報によって、会衆の中に、帝釈、梵王、八部衆の身を現じ、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を現じ、教化のために女身を現じ、声聞・辟支仏の姿の者たちがいる」と語る。さらに現意天子は世尊の要請を受けて、その集会の参加者たちを轉輪聖王・釈提桓因・梵王・摩訶迦葉・釈迦牟尼仏の姿になるような神力を示した。^九

このように本經では首楞嚴三昧によって菩薩は自在に姿を変えて衆生を教化するということが、説示されている。なお、仏が姿を変えて教化を行うということを仏自身が開示・宣言する「六或示現」に相当する經文は、『維摩經』と『首楞嚴三昧經』には見られない。

三、『法華經』における六或示現と普現色身三昧の関係

『法華經』「寿量品」において、法華經の教主たる釈迦仏は、自ら久遠の過去に成仏していたことを明かし、「衆生を教化するために、機に応じて、自身の姿を示現し、釈迦仏自身について説き、或いは他仏について説く」と宣言する。まず、六或示現は、どのように解釈すべきかを検討しておこう。『妙法蓮華經』の經文、「如来所演經典。皆為度脱衆生。或説己身。或説他身。或示己身。或示他事。諸所言説。皆實不虛」（既出）の梵本の対応箇所は次の如くである。¹⁰

yān ca kulaputrās tathāgataḥ sattvānaṃ vinayārthaṃ vācaṃ bhāṣata ātmopadarśanena vātmārāmbhaṇena vā parāram-
baṇena vā yat kinçit tathāgato vyāharati sarve te dharmaparyāyaḥ satyās tathāgatena bhāṣitā nāsty atra tathāgatasya
mīṣāvādah /

また善男子たちよ、如来は衆生を教化するために、自己を示現し、あるいは自己を抛り所とし、あるいは他者を抛り所したりしてことばを語るのであるが、如来が何であれ説くところのそれら一切の法門は、如来が語る真実である、ここにおいて如来に虚言は無い。

經文の趣旨は、法華經の教主たる釈迦仏は、衆生を教化するために、機に応じて、自身の姿を示現し、釈迦仏自身について説き、或いは他者について説き、ことば（法華經）を語る、それはすべて真実であるということである。これは、『法華經』の中心部分——仏のことばによって教説が開示される——の所説である。

梵本の「自身を示現し、あるいは自身を抛り所とし、ことばを語る」は、羅什訳の「或説己身。或示己身。或示己事。」に相当し、「あるいは他者を抛り所としたりしてことばを語る」は、「或説他身。或示他事」にはば相当するといえるが、「或説他身」は対応しないので完全な六或になっていない。羅什はこれを「六或示現」という訳文に整理（あるいは展開というべきか）した。これにより「釈迦本仏は種々の諸仏の姿を取り、種々の手段で教化を行うものである」という解釈の可能性が生じた。それが以

下の四で概観するような中国注釈書の説明につながるものである。

卷末の六品では、当時の仏教世界の活動（三昧・陀羅尼）が、『法華経』の実践として宣揚されている。先に見たように『維摩経』や『首楞嚴三昧経』で説かれている高位の菩薩が神力によって種々に姿を変えて教化を行なうという実践は、經典の読み手にとって強いインパクトをあたえるものであり、また大乘經典の構成要素として確固たる地位を占めるようになっていたと考えられる。そのような能力（三昧）を説く経文は、經典の流通を説示する各品において、当に相応しい項目・構成要素となる。そこで『法華経』の作者は『維摩経』や『首楞嚴三昧経』に登場する菩薩が変身する経文を考慮した上で、まず寿量品で仏の「六或示現」を説き示し、さらに菩薩の活動が中心となる卷末六品の冒頭に位置する「薬王品」において、「普現色身三昧」という名称を付与した。そして具体的には続く妙音品と観音品において、菩薩が種々の姿を取って衆生教化・救済の活動を行うという経文に統合した。この二つの品は『維摩経』『首楞嚴三昧経』の変身に関わる経文を集約したものと言えるであろう。

以上のように、『法華経』はそれまでの変身に関する先行經典を視野に入れたうえで、仏の視点を新たに導入し、經典の流通のために変身する菩薩の活動を説いている。即ち『法華経』において種々の姿を示現するという神通・能力は、教主釈尊が自ら開示する「六或示現」であり、卷末六品においては、妙音菩薩の三十四身、観世音菩薩の三十三身として描き出されている^二。

ところで、一切皆成仏を説く『法華経』においては、仏と菩薩・衆生の間に本質的な差異は存在しない（「はずである」）。このことは日蓮の「六或示現」と十界互具の関係を述べた『観心本尊抄』等の遺文において明かされることになる。以下、それを検討するのであるが、まず中国における『法華経』の解釈を見ておこう。

四、六或示現について―注釈書の解釈―

以下では、中国の注釈書の説明を概観する。

① 隋の吉蔵『法華義疏』卷第一〇の説明は次の如くである。^{二三}書き下しは横超慧日訳によっている。^{二三}

「或は己身を説き或は他身を説く」とは、前の句には総じて法を説き物を益することを明す。今は別して二種の方便を開く。即ち是れ二輪なり。自ら釈迦の身を説くを己身を説くと名け、阿弥陀仏の身を説くを他身を説くと名く。「或は己身を示し或は他身を示す」とは、上は是れ説法輪なり。今はこれ神通輪なり。分身仏等を現する如きは己身を示すと名け、阿閼仏等を示すは他身を示すと名く。「或は己事を示し、或は他事を示す」とは、三たび浄土を變ふるを己事を示すと名け、香積の土を示すを他事を示すと名く。身既に自他あり。土を説くも亦応に然るべし。

吉蔵の注釈では具体的な例が示されている。「己身を説く」とは釈迦仏が自身について説くことである。「他身」は釈迦仏以外の諸仏に限られている。後述の基の注釈も同様である。

② 隋の天台智顗『妙法蓮華經文句』卷第9下の説明は次のごとくである。^{一四}書き下しは菅野博史訳による。^{一五}

「如来所演」の下は、第二に現生の形・声の益を明かす。先に形・声を明かし、次に不虛を明かす。「説」は即ち声教、「示」は即ち形規なり。形・声は自他を出でず。法身を説くが若きは是れ「己身を説き」、応身を説くが若きは是れ「他身を説く」。若し然灯仏に値うと言わば、即ち是れ「己身を説く」。然灯は是れ我が師、これ「他身を説く」。正報を示すはこれ自己の事、依報を示現するは是れ「他事を示す」。随他意語は是れ「他身を説く」。随自意語は是れ「己身を説く」。己他の事を示すこと、亦た類して此の如し。

智顗はまず「説」は本仏の声による化導の利益、「示」を姿・身体による化導の利益であることを明示する。「或説己身」は自証の法身を説くのであるから、必然的に随自意語である。「或説他身」は応身を説き、随他意語である。過去仏である然灯仏に値うと言えは「説己身」である。然灯仏は自分の師であると言えは、「説他身」である。「或示己事」は正報である釈迦仏自身を示すことであり、「或示他事」は依報の国土を示すことである。

この説明は抽象的であるが、本仏としての釈迦仏という理解に立つて、吉蔵に見られる阿閼仏というような釈迦仏から離れた

例を避けて注釈しているように見受けられる。この箇所では智顗は六或示現と十界互具を関係させて読み込んではいない。これは湛然の『文句記』も同様である。^{一六}

一方、智顗は『法華玄義』巻第七上において「本門の十妙を明かす」として、本門の十の勝れた特性を挙げる。その第五の「本神通妙」を解説する過程で、「四 文を引きて証成す」、即ち経証として、六或示現の经文を次のように引用している。^{一七}書き下しは菅野博士訳による。^{一八}

文に云わく、「如来の秘密の神通の力」と。又た、中間の文に云わく、「或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す」と。即ち是れ形を十界に垂れて、種種と作る。本を驗するに亦た然り。これ本神通妙なり。

ここでは如来がその形を十界に垂迹すると説明されている。従って理論的に仏は十界のいずれであれ随意に姿形を現すことが可能となる。この箇所は後に触れるように、日蓮が『諫曉八幡抄』で言及しており、重要な注記である。

③ 唐の慈恩寺、基『妙法蓮華經玄贊』巻第九之末の説明は次の如くである。^{一九}書き下しは布施浩岳訳。^{二〇}

説とは言説するを謂ひ、示とは示現するを謂ひ、身とは即ち内體にして、事とは事業を謂ふ。説己身とは、我が身は曾て薩埵王尸毘王たり等と説くを謂ひ、説他身とは、彌勒は往には一切智光仙人たり、阿彌陀佛は法藏比丘と作る等と説くが如し。示己身とは、現じて釋迦と為りて身自ら世に出で、勝鬘遙かに請ひて佛空に現ずる等なり。示他身とは、現に毘婆尸佛と為りて世間に出現し、塔を開きて多寶佛を現ずる等なり。示己事とは、現じて釋迦と為り、魔を降し、道を成じ、法を説き、通を現ずる等の事業にして、示他事とは、大通智勝と作りて通を現じ、地を動かし、光を放ち、道を成ずる等の事業を示すなり。衆生を度せんが爲に能く此の事を現じ、皆實にして虚しからざるなり。

このように基は、六或のそれぞれに對し、吉藏よりも多くの具体例を挙げて注釈している。

以上、注釈家による六或示現の説明には相違点が見受けられるものの、六或示現は、発迹顕本した後の本仏のことばであり行相である。従って、己身は教主釈尊とその過去世の身体や菩薩であり、他身は迹仏、あるいは仏の眷属として説明されているの

である。

吉蔵と基の注釈を見る限り、六或示現が「仏が在俗者の身を示現する」ということまでを含んではない。すなわち両者の注釈書では、仏の六或示現は菩薩の普現色身三昧とは次元が異なるものとして解釈されているのである。これらとは対照的に、智顗は「十界に垂れる」と述べているように仏と他の九界の相互関係を承認しているように見受けられる。この解釈の方向を一層進展させている日蓮の解釈を見てみよう。

五、日蓮の解釈

① 『観心本尊抄』【昭定118番】

『観心本尊抄』の第十三番問答では、十界互具は法華經のどこの經文に説かれているか、という問いに答える。ここまで地獄界所具の仏界から菩薩界所具の仏界に至る事例が法華經を引用して説かれるのであるが、その最後で六或示現が引用される。^{三二}

經に云く、「或説己身、或説他身」等云云。即ち仏界所具の十界なり。

ここでは六或示現が、仏界に具わった十界を明かすことの經証として引用される。本仏の己身・己事は仏界である。また本仏の他身・他事は九界に及ぶので、結果として仏界にすべての十界が含まれていることになる。したがって仏は他の九界に属する者の姿を現すことができるのである。

② 『日眼女釈迦仏供養事』【昭定327番】

三界の教主釈尊の木像を造立した日眼女から届いた供養に対する礼状である。宗祖は三世の諸仏、諸菩薩、諸天、諸神、星宿、世間の主等々を列举して、それらはすべて本仏の分身・垂迹であると説く。その經証として、六或示現を引用する。^{三三}

法華經の寿量品に云く、「或説己身、或説他身」等云云。東方の善徳仏・中央の大日如来・十方の諸仏・過去の七仏・三世の

諸仏、上行菩薩等、文殊師利・舍利弗等、大梵天王・第六天の魔王・釈提桓因王・日天・月天・明星天・北斗七星・二十八宿・五星・七星・八万四千の無量の諸星、阿修羅王・天神・地神・山神・海神・宅神・里神宅神・一切世間の国々の主とある人、何れが教主釈尊ならざる。天照太神・八幡大菩薩も其本地は教主釈尊也。例せば釈尊は天の一月、諸仏菩薩等は万水に浮かぶる影なり。釈尊一体を造立する人は十方世界の諸仏を作り奉るひとなり。

このように「一切世間の国々の主とある人」、「天照太神・八幡大菩薩」までが、仏の六或示現が及ぶ範囲になるのである。なお中国の注釈書による限り、六或示現の範囲は仏・菩薩までであった。この引用にみえる「一切世間の国々の主」の姿を取るといような解釈は『法華経』では卷末六品において、仏ではなく菩薩の変化を説く経文に見られるものであり、仏が菩薩でない人の姿を取るといような経文はなかった。さらに宗祖は『諫曉八幡抄』において、六或示現と普現色三昧の結びつきを次のように明言している。

③『諫曉八幡抄』【昭定395番】

本遺文は八万大菩薩を諫曉する理由を説く。その結論部で、八幡大菩薩はインドでは本地神として不妄語の法華経を説き、日本国に垂迹して正直の人の頂きに住むのであるから、必ずや法華経の行者を守護する、と述べる。経証として、まず安樂行品の「諸天昼夜常為法故而衛護之」を引用して南無妙法蓮華経と唱える人を大梵天・帝釈・日月・四天が昼夜に守護することを述べ、^{二三}続いて寿量品の六或示現を引用する。

又第六の巻に云く、「或説己身、或説佗身、或示己身、或示佗身、或示己事、或示佗事。」と文。観音尚三十三身を現じ、妙音又三十四身を現じ給ふ。教主釈尊何ぞ八幡大菩薩と現じ給はざらんや。天台云く、「即ち是れ形を十界に垂れて種々の像をなす」等と云云（昭定1649頁）。

菩薩が様々な姿に変身して人々に法華経を説くという経文は、『妙法華』の「観世音菩薩普門品」第二十五と「妙音菩薩品」第二十四に登場し、伝統的に観音の三十三身、妙音の三十四身と通称される。^{二四}日蓮は六或示現を引いて、観音や妙音という菩薩で

さえ、自在に多数の姿に変身するのであるから、教主釈尊が八幡大菩薩の姿を示さないことがあるのか、と述べている。ここで日蓮が「天台云く」としているのは、先に言及した『妙法蓮華経玄義』巻第七上で本門の本神通妙の「文を引きて証成す」の箇所である。引用の通り、本仏は十界に様々な像を取って垂迹する、従って教主釈尊が八幡大菩薩の姿を現すのも容易である、と明言する。

このように日蓮は、寿量品の六或示現を経証とし、天台の十界互具の教理を引いて、「釈迦本仏は諸仏から在家者に至るまで、あらゆる姿を現す（垂迹する）能力を持っている」という理解を述べている。

六、まとめ

『法華経』にやや先行する『維摩経』、『首楞嚴三昧経』においては、菩薩が高度な能力（三昧）によって自在に姿を変えという経文が見られる。これが普現色身三昧（現一切色身三昧）である。ただし、仏自身が自在に在俗者に変身するというような記述は見られない。これは、両經典の段階では、仏は菩薩行を成就した存在であるのではや自ら他者の姿を示現することはない、と理解されていたからであろう。

これに対し、菩薩が他者の姿を示現することを積極的に説くこれらの經典を視野に入れた上で、『法華経』は「寿量品」において、仏が積極的に自身を他身に変えて教えを説くなどのいわゆる「六或示現」を説示する。これは『法華経』に至ってはじめて開示されたのである。付嘱・流通をテーマとする巻末の諸品では、妙音菩薩・觀世音菩薩が種々の姿に変身することが具体的に列挙されて説かれている。これらの経文は普現色身三昧と総称できるものであり、それまでの經典を集約した意味を持っている。『法華経』によれば、仏も菩薩も自在に種々の姿を現すことができるのである。

中国の注釈家の中では、天台智顗が法華経本門の顕著な特徴の一つとして「本神通妙」を挙げて注釈する際、如来秘密神通之

力から六或示現に至る経文は、如来が十界に垂迹することを示す、という解釈を提示した。

日蓮は、十界互具とも言うべき智顗の解釈をさらに展開して、仏の六或示現と菩薩の普現色身三昧を統一・融合した。すなわち、六或示現は仏自身が時代や地域の制約を越えて種々の姿を示現することを説き示す経文である、と解釈し、日本における『法華経』実践の新たな次元を切り開いた。かくして『法華経』の教主釈尊は我々の目の前に種々の姿を取って出現するのである。

略号・参考文献等

- KN: *Saddhammapundarikā*. ed.H.Kern and Bunyiu Nanjio. *Bibliotheca Buddhica* X.1908-12. Reprint,Tokyo: Meicho-Fukyu-kai.1977.
- 維摩経 [2004] 『梵藏漢対照『維摩経』 *Vimalakīrtinirdeśa*』大正大学総合佛教研究所
- 昭定 『昭和定本日蓮聖人遺文』
- 両説開結 『真訓両讀法華経并開結』平楽寺書店版
- 『法華文句會本』 [1980] (天台大師全集法華文句一～五) 中山書房仏書林
- 伊藤瑞叡 [2004] 『法華菩薩道の基礎的研究』平楽寺書店
- 横超慧日訳 [1939] 『国訳一切経経疏部五』大東出版社
- 岡田行弘 [2014] 『法華経』妙音品の考察』『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』738-749、佼成出版社
- [2015] 『「八千頌頌般若」と『法華経』の共通性―構想・教説の展開・物語をめぐる―』『印度学仏教学研究』第63巻第2号、852-815.
- [2017] 『「法華経」と「大品般若」における仏の神力・神変』『印度学仏教学研究』第66巻第1号、397-391.
- [2019] 『大乘経典における新たな仏の創出』『法華文化研究』第45号、1-19
- 梶山雄一 [2012] 『第10章神変』梶山雄一著作集第3巻『神変と仏陀観・宇宙論』春秋社、237-285.
- 菅野博史訳註 [1995] 『法華玄義（中）』第三文明社
- 菅野博史訳註 [2011] 『法華文句（Ⅳ）』第三文明社
- 下田正弘 [2013] 『初期大乘経典のあらたな理解に向けて―大乘仏教起源再考―』シリーズ大乘仏教4『智慧／世界／ことば 大乘仏典Ⅰ』春秋社、3-100.
- 丹治昭義・長尾雅人 [1980] 『大乘仏典7 維摩経・首楞嚴三昧経』中央公論社
- 山部能宜 [2011] 『第4章 大乘仏教の禪定実践』『シリーズ大乘仏教3 大乘仏教の実践』96-125、春秋社

平岡聡 [2015]『大乘經典の誕生 仏伝の再解釈でよみがえるブッダ』筑摩選書
藤田宏達 [1970]『原始浄土思想の研究』岩波書店
布施浩岳訳 [1939]『国訳一切経経疏部五』大東出版社

注

一 下田正弘は大乘經典の成立に関して、「書写テキストとして大乘經典が出現した。その内部世界において真の仏説とはなにか、という仏説の正統性をめぐる言説が展開された」[2013, 53-54]という重要かつ画期的な視点を提示した。この書記經典であるという自覚が大乘經典に共通の特性である。

それでは、個々の初期大乘經典が具体的にどのような共通性をもっているのだろうか。筆者はすでに「般若經典」と『法華經』の共通性に着目した拙論で次のような平行的な構成要素を指摘した。

- ① 授記と二段階の付嘱
 - ② 經卷の崇拜供養と現世利益
 - ③ 經典を象徴する菩薩の登場（常啼菩薩と常不輕菩薩）
 - ④ 第二の転法輪
 - ⑤ 經典の反对者に対する批判
- さらに以下の諸点も共通する構成要素となっている。
- ⑥ 仏教全体を包括するという自己評価
 - ⑦ 浄土（仏国土）の描写
 - ⑧ 誓願とその成就
 - ⑨ 神力・神変
 - ⑩ 魔の所行
 - ⑪ 普現色身三昧
 - ⑫ その他（空中からの声、菩薩による他方仏の国土との往来）
- この中、⑪は本拙論で取り上げるので⑥から⑩の共通性について、簡単に述べておこう。
- ⑥ 「般若經典」の場合、般若波羅蜜が、仏のすべての教えを包括するものである。『維摩經』では仏と衆生が不二であるという「不思議解脱法門」に諸仏の教えが包括される。『法華經』では、如来神力品のいわゆる四句要法「善男子たちよ、私はこの法門において、要約して、す

べてのブッダの教え（法）、すべてのブッダの威神力、すべてのブッダの秘密、すべてのブッダの深遠な境地を説いた。」(K1, 392, 23) から、仏教を全て包括するという自己評価を読み取ることができる。

⑦ 藤田宏達の研究（藤田、1970, 474以下）に多くの資料が網羅されている。

⑧ 誓願は『無量寿経』と『法華経』において重要な意義を持つ。拙稿〔2019〕では、『無量寿経』の中心的なテーマが「誓願の成就による成仏」であることと『法華経』「方便品」で語られる釈迦仏の誓願は「一切衆生の成仏」であることを確認した。

⑨ 「神力・神変」に関しては、梶山雄一〔2012〕の研究が重要である。拙論〔2017〕では、『法華経』と「小品般若」および「大品般若」の記述について検討している。

⑩ 「魔の所行」とは、菩薩の修行を妨害する魔（マラ）の記述である。このような経文が繰り返し登場する『八千頌般若』について、平岡聡は「般若経は仏伝の降魔成道を基盤に創作された大乘経典といえる」と述べ、また『首楞嚴三昧経』のマラについても仏伝をベースにしていると述べている〔平岡2015, 181-194, 199-200〕。一方で、『法華経』や『無量寿経』には、「魔の所行」を述べる経文は見られない。この理由として考えられるのは、両経典がともに仏から衆生へという立場・視点から説かれているということである。修行する菩薩にとつての障害である「魔の所行」に関する記述が登場するのは、菩薩の立場から説かれている諸経典であると言えよう。

平成十四年十二月十八日 改訂初版、発行所 日蓮宗新聞社、四〇四頁

二 大正九、四二下

三 伊藤〔2004〕730

四 山部〔2011〕96

五 維摩経〔2004〕310以下

六 なお、鳩摩羅什と玄奘は、*iriyāḥ* (= *iriyā*) と読み、威儀と訳している。羅什訳は次の如くである。諸有衆生類 形聲及威儀 無畏力

七 菩薩 一時能盡現（大正十四、五五〇上）。

八 大正十五、六四〇上二三下二。丹治昭義訳〔1980〕三〇七以下。

九 大正十五、六三五中十九二四。丹治昭義訳〔1980〕二五五二六〇。

一〇 K1/318

一一 妙音菩薩の三十四身と観音菩薩の三十三身の関係については、岡田行弘〔2014〕で詳細に論じた。

一二 或説己身或説他身者。前句總明説法益物。今別開二種方便。即是二輪。自説釋迦之身名説己身。説阿彌陀佛身名説他身。或示己身或示他身者。上是説法輪。今は神通輪。如現分身佛等名示己身。示阿閼佛等名示他身。或示己事或示他事者。三反淨土名示己事。示香積土名示他事。身既有自他。説土亦應然。（大正三四、六〇五下二九）

- 一三 横超慧日記 [1939] 474
- 一四 如来所演下。第二明現生形聲益。先明形聲次明不虛。說即聲教示即形規。形聲不出自他。若設法身是說己身。若說應身。是說他身。益言值然燈佛。即是說己身。然燈是我師。是說他身。示正報是自己事。示現依報是说他事。隨他意語是說他身。隨自意語是說己身。示己他事。亦類如此。
(大正三四、一二一下一六一二一)
- 一五 菅野博士記 [2011] 1115-6
- 一六 會本 [1980] 2313
- 一七 文云。如来秘密神通之力。又中間文云。或示己身或示他身。或示己事或示他事。即是垂形十界作種種像。驗本亦然。是本神通妙也(大正三三、七六六上四一八)
- 一八 菅野博士記 [1995] 692
- 一九 說謂言說。示謂示現。身即內體。事謂事業。說己身者。謂說我身曾為薩埵王尸毘王等。說他身者。如說彌勒往為一切智光仙人。阿彌陀佛作法藏比丘等。示己身者。現釋迦身自出世。勝鬘遙請佛現空等。示他身者。現為毘鉢尸佛出現世間開搭現多寶佛等。示己事者。現為釋迦降魔成道說法現通等事業。示他事者。示作大通智勝現通動地放光成道等事業。為度衆生能現此事皆實不虛(大正三四、八三〇下一二一二一)
- 一〇 布施浩岳記 [1939] 564
- 一一 昭定705
- 一二 昭定1623
- 一三 昭定1849
- 一四 岡田 [2014] 参照

補注

六或示現(ろくわくじげん)は、經文に六つの「或」があることから、このように通称される。日蓮の遺文中には見られない用語である。『日蓮聖人遺文辞典 教学篇』(身延山久遠寺発行 2003)の「わくせつこしんわくせつたしん」の項を参照(一二九一頁)。